

第5学年 国語科学習指導案

1 単元名 「伝記を読み、自分の生き方について考えよう」

(「やなせたかしーアンパンマンの勇気」)

2 児童の言語活動及び活動目標

○伝記を読み人物がどのように描かれているのかを捉え、理解したことをもとに自分の考えをまとめよう。

3 教師の指導目標

○人物の行動や考え方を捉えるときに、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識することができるようにする。 [知識・技能](1)オ

○人物の心情や考え方などについて、描写をもとに捉えることができるようにする。
[思考力・判断力・表現力等]C(1)イ

○文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができるようにする。
[思考力・判断力・表現力等]C(1)オ

○文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げることができるようにする。
[思考力・判断力・表現力等]C(1)カ

○言葉がもつ良さに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。
[学びに向かう力、人間性等]

4 単元の評価規準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	主体的に学習に取り組む態度
①人物の行動や考え方を捉えるときに、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識している。((1)オ)	①人物の心情や考え方などについて、描写をもとに捉えている。 (C(1)イ) ②文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。 (C(1)オ) ③文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げることができるようにしている。 (C(1)カ)	①進んで文章を読み、理解したことに基づいて自分の考えをまとめるとともに、友達との対話や交流を通して自分の読み方を広げようとしている。

5 主体性の評価基準

主体的に学習に取り組む態度	
A	<ul style="list-style-type: none"> ・ Bに加えて、題名とのつながり、繰り返しの言葉、気持ちの変化、場面どうしのつながりなど複数の視点から人物の生き方・考え方を捉えようとしている。 ・ Bに加えて他の伝記と比較するなど、批判的な視点をもって人物の生き方・考え方を探ろうとしている。 ・ Bに加えて、人物の生き方・考え方を捉えるための読み方について友達にアドバイスをしている。
B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 登場人物の言動に着目して人物の生き方・考え方を捉えようとしている。 ・ 読み取ったことをもとにして他者の考えを取り入れながら、自分の考えを形成しようとしている。
C	人物の生き方・考え方を捉えようとしておらず、読み取ったことをもとに自分の考えをまとめようとしていない。

6 単元について

(1) 児童の実態と身に付けさせたい力

本学級の児童はこれまで、「なまえつけてよ」では、登場人物の相互関係や心情を捉えるために、登場人物の会話や行動や、場面ごとの心情の変化に伴う関係性の変化を読み取ることが重要であることを学習している。「見立てる」「言葉の意味がわかること」では、説明文の要旨を捉えるために、文章の表現や構成を捉えることや、文章中の原因と結果の関係ととらえること、事実や事例にも筆者の考えが含まれていることを学習してきた。また、国語科の学習では、単元の最初に一人ひとりが「この単元で自分が身に付けたい力」を決めている。その力を身に付けるためにどのように学習を進めていくのか児童主体で学習計画を立て、適宜調整を行うようにしている。単元の最後には「どんな力が身に付いたのか」「学んだことをどのようなことに生かしていきたいか」を振り返ることによって、児童が主体的に学習に取り組む意識を育む途上にあると言える。

そこで、本単元では、これまでに学習してきた説明文の読み方と物語文の読み方を使い分け、「叙述をもとに人物の生き方や考え方を捉え、理解したことをもとに自分の考えをまとめる力」と、「文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自らの読みを広げる力」の育成を目指したいと考える。そのために、人物の生き方を理解するために着目した視点を明らかにして自分の考えをまとめられるよう、指導していきたい。人物の生き方を捉えるための着眼点として、人物の行動や会話、情景描写、気持ちの変化、場面どうしの繋がり、題名との繋がり、人物の生い立ち、繰り返しの言葉などが考えられる。友達との交流を通して、より良い伝記の読み方を探り、自分の読み方の選択肢を広げられるよう指導していきたい。

また、本教材を通して、「伝記を読み人物がどのように描かれているのかを捉え、理解したことをもとに自分の考えをまとめよう。」という言語活動を設定した。自分の生き方にどう生かしていくかを考える活動を設定することは、児童が自分事として学習に取り組むきっかけになると考える。伝記を読み、新しい考え方を自分に取り入れることの良さを、実感できるようにしたい。

(2) 本単元で扱う言語活動と教材について

本単元は、小学校学習指導要領国語[第5学年及び第6学年]の[知識及び技能]における、「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」の指導事項「語彙 オ 思考にかかわる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語句を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと。」「[思考力・判断力・表現力等]における「C 読むこと」の指導事項「構造と内容の把握 イ 人物の心情や考え方などについて、描写をもとに捉えること。」「考えの形成 オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。」「共有 カ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。」を受けて設定したものである。

学習材である「やなせたかし—アンパンマンの勇気」は、五つの場面から構成されており、文学的な描写と説明的な描写が混在している。これまでの学習を生かし、物語文の読み方と、説明文の読み方を使い分け、人物の生き方がどのように描かれているのかを考えていく。

文学的な描写の特徴は3つある。1つ目は、登場人物の心情がわかる叙述である。「なまえつけてよ」では、会話文や行動から心情を想像することで人物像を捉えることを学んでいる。本単元の第1場面では、「ぼくも、何かできることをしなければ。」など、筆者が考えるたかしの心情が、かぎっこを使って表現されている。このような言葉に着目することで、人物の考え方がわかることに気付かせたい。また、第4場面では、批判されても「正義を行い、人を助けようとしたら、自分も傷つくことをかかごしなければならぬ。」という信念のもとに、アンパンマンを書き続けたことが描かれている。このような行動から、たかしが「自分の信念を貫く人物」「あきらめない心をもった人物」などといった人物像が考えられる。さらに第5場面では、体が弱っていても、東日本大震災の被災者を励ますたかしが描かれる。「傷ついた人たちのために何かをしたかったのだ。」という心情がわかる描写から、「自分が傷ついていても人を助けようとする人物」「困っている人のために力を尽くす人物」などといった人物像が考えられる。

2つ目は、題名や、繰り返し用いられている言葉である。本文では、「正義」や、題名にもある「勇気」という言葉が繰り返されている。たかしが「正義」や「勇気」をどのようにとらえているのかを読み取ることで、たかしの生き方が見えてくると考える。

3つ目は、中心人物に変化をもたらす出来事の描写である。「たずねびと」では、きっかけとなる出来事により生じた人物の変化をもとに全体像を捉えた。本単元の中では、戦場で体験した食糧不足の苦しみや、弟の戦死が、たかしの生き方・考え方に大きく影響している。出来事が人物にどのような意味をもっているのかを読み取ることで、たかしの生き方に迫ることができると考える。

説明的な描写の特徴は、事実が客観的に説明されているという点にある。事実として取り上げられていることを確かめることは、人物に対し筆者がどのように考えているのかを捉えることに繋がる。本文は、「震災から二年半がたった二〇一三年十月十三日、九十四才でなくなった。その直前まで、絵や物語をかいていたという。」という説明的な文章で終わる。ここから、最期まで自分ができることを全うする人物である、と筆者が捉えていると考えられる。これらのような叙述の特徴を見分けながら教材文を分析し、たかしの生き方がどのように描かれているのかを捉えることで、自分の生き方と重ねて考えを形成することへと繋げていきたい。

そのために、第一次では、導入で「自分の生き方」について振り返る。「生き方についてそれほど考えたことがなかった。」や、「自分以外の人の生き方はどのようなものだろう。」などの考えが出て

くるよう、児童と対話する。伝記には人物の生き方が描かれていることを知ったうえで、本文を一度読む。伝記は文学的な描写と、説明的な描写によって構成されていることを確認し、新しいジャンルの読み物であることを抑える。伝記を読んで人物の生き方がどのような言葉によって表現されているのかを捉え、それを基に自分の考えをまとめることを学習課題に設定し、学習計画を作成する。指導事項が達成される学習計画になっているのかを確認し、必要に応じて個別に声掛けをする。

第二次では、はじめに全体で事実として描かれているところを見つけ出し、物語文の読み方と、説明文の読み方を使い分けることを確認する。次に、児童が作成した学習計画を基に教材文を読み、自分の考えをまとめていく。このときに、ノートやギガタブにまとめたものを共有し、友達の考えを自由に見られるようにすることで、自分と友達の読み方を比較し、参考にできるようにする。そして、たかしの生き方を捉えるために何に着目して読んだのかを友達と伝え合い、自分の読み方を広げていく。

第三次では、本文を読んで理解した人物の生き方に基づいて自分の考えをまとめる。第二次で学習した、伝記を読んで「自分もこうありたい」という思いが生じたことや、読み方の選択肢が増えたことを実感させ、これからの学習や生活にいかしていこうという気持ちを育てていきたい。

7 指導計画（9時間扱い）

過程	時間	主な学習活動・内容	○指導上の留意点	評価規準・評価方法等
第一次 つかむ	1	<p>○自分の生き方について考え、伝記は人物の生き方が描かれていることを押さえる。</p> <p>○本文を読み、文学的な描写と、説明的な文章が混合している文章であることを押さえる。</p> <p>○既習事項を振り返り、人物の生き方を捉える読み方について考え、学習課題を設定する。</p>	<p>○自分の生き方とはどのようなものなのか、他者と比較したことがあるかなど、児童が「生き方」について考えられるように対話する。</p> <p>○これまでの学習を想起させ、新しいジャンルの読み物であることに気付けるようにする。</p> <p>○学習計画は途中で変更になってもよいこと伝え、自分で学習の進め方を調整できるようにする。</p>	<p>[主] <u>ノート</u></p> <p>・人物像を捉えて読むには、どんな言葉に着目して読めばよいのかを考え、学習計画を立てられているかの確認</p>

	2	○事実と筆者の考えで書かれているところを区別しながら本文を読む。	○事実としてか書かれている箇所の言葉の特徴を捉えられるようにする。	[知・技] <u>ノート・教科書</u> ・伝記に描かれている事実と筆者の考えを区別して読んでいるかの確認
第二次 深める	3 4	○物語文の読み方と説明文の読み方を使い分けながら、やなせたかしの生き方・考え方を捉えて本文を読む。	○行動、会話、繰り返しの言葉、題名とのつながり、出来事とそれに対する筆者の考えなどを読み取れるようにする。	[思・判・表] <u>ノート・ギガタブ</u> ・人物の生き方・考え方について、描写を基に捉えられているかの確認
	5	○たかしの生き方を読み取るために、どんな言葉に着目して読んだのか、自分の読み方についてまとめる。	○生き方を読み取るための方法についての自分の考えと、その読み方によってたかしの生き方をどう読み取ったのかをまとめられるようにする。	[思・判・表] <u>ノート</u> ・生き方を読み取るための方法と自分の考えをまとめられているかの確認
	6	○まとめたことを友達と伝え合う。	○新たに得た読み方について振り返られるようにする。	[思・判・表] <u>ノート・ギガタブ</u> ・友達との交流によって自分の読み方を広げることができているかの確認
第三次 広げる	7 8	○第一、第二次で学んだことを生かし、自分自身と重ねて考えたことをまとめる。	○必要に応じて、他の人物の伝記や、やなせたかしについて書かれている他の伝記を読んでもよいことを伝える。	[思・判・表] <u>ノート</u> ・自分自身と重ねて考えたことをまとめられているかの確認

9	○単元の振り返りとして、人物の生き方を捉え、自分の考えをまとめるときに考えたことや、学んだことの中で今後に生かしていきたいことをまとめる。	○これまでの学習を通してできるようになったこと、身に付いた力、実生活で生かしていきたいことを振り返る。	[主] ノート ・伝記を読み、理解したことを生かして、より良い考えの表し方を追求しようとしているかの確認
---	---	---	--

7 研究の視点

研究主題

主体的・対話的で深い学びを通して、
自ら考え、行動できる力を身に付けた子どもの育成

視点1 自ら考え、行動できる力を身に付けさせるための指導の工夫

本単元において、児童が「主体的・対話的で深い学び」を実現した姿を「繰り返し文章を読み、人物の生き方・考え方について叙述をもとに捉え、どんな表現に着目して読むのかを友達と伝え合って読み方の選択肢を広げながら、それを生かして人物の生き方をこれからの自分にどう反映させていくかを書き表そうとしている姿」と考えた。そこで、児童が「主体的・対話的で深い学び」を実現するための必要な手立てとして以下の2点を実践した。

○自分ごととして考える言語活動

本単元では、実生活と繋げるための手立てとして言語活動を「伝記を読み人物がどのように描かれているのかを捉え、理解したことをもとに自分の考えをまとめる」と設定した。伝記を読み、自分の生き方と重ねることは、「自分もこうありたい」という憧れを抱いたり、自分にはない新しい生き方・考え方を知ったりするきっかけになると考えた。また、偉人や有名人が残した格言は、これからの自分を支える言葉になるとも考えた。本単元の学習を通して自分の生き方について振り返ることで、これからの実生活の改善に繋げていけるようにした。その結果、「やなせさんのように、自分が苦勞しても人を助けられるようになりたい。」や、「アンパンマンをかくことを通して最後まで人のために行動したやなせさんを見習いたい。」など、自分の生き方と重ね、生活に生かそうとする記述が見られた。また、「伝記を読むことは自分の生き方を見直すチャンスになる。」と考えた児童もおり、伝記を読むことの意義について考えを深めることができた。

しかし、人物の生き方を自分の生き方と重ねて考えることに難しさを感じる児童もいた。これは、何に着目して読めば生き方を捉えられるのかが分かっていたことや、自分と重ねて考えることがどういうことか理解できていなかったことに起因すると考えた。生き方とはどのようなことか、その枠組みを考えさせる時間を導入に設ける必要があると感じた。

○自分の読み方を深める伝え合い

本学級の児童は、これまでの学習の中で、共有を行うことで自分にはない読み方を新たに知ることができると実感している。本単元でも、これまでの学習を生かし、自分の読み方をより良いものにし

ていくために、どんな方法があるのか尋ねると、児童からは「友達の読み方を知って自分に取り入れること」という発言があった。伝記を読むときの視点が増えていくことを実感させることで、身に付いた力を実感し、これからの学習や生活に生かしていこうとする気持ちを育てていきたいと考え、指導を行った。

人物のどのような経験が筆者の人生に大きな変化をもたらしたのか、あるいはどんな行動が筆者の生き方を表しているのかは、読み手によって解釈が異なる。何に着目して読んだのかを友達と共有し、お互いの視点について話し合う姿が見られたことが成果だと考えた。

一方で、新しく知ったことを実践する機会がないことを児童に気付かせ、次の活動へと自ら行動できるようにすることが課題だと考える。より良い考えや方法を求めて活動を提案する経験が少なく、自信がないことが原因なのではないかと考えた。さらに自分の読み方を深めたり、考えを広げたりできないかを振り返り、新しいことを提案することに自信をもてるような手立てを考えていく必要があると感じた。

視点2 「子ども主体の探求的な学び」を実現するための授業改善

○学習課題を解決するための見通しをもつための時間の設定

本学級の児童は、「なまえつけてよ」の学習から、自分が身に付けたい力を明確にし、その上で学習計画を作成して学習を進めてきた。はじめは、どのように学習計画を立てたらよいか分からず、一人で学習することに不安を感じている児童が少なくなかった。しかし、学習計画を積み重ねることで、「見立てる」「言葉の意味がわかること」の学習では、文章を読み返し、要旨を探そうとする児童の姿が見られた。一方で、何をしたらよいかわからない児童や、身に付けたいと考えている力と離れた学習を行っている児童への手立てが不足していたと感じた。そこで、学習計画を見直し、見通しをもって学習するための支援を行った。学習計画を立てる段階で、単元を通して身に付けたい力は何なのか、そしてそのためにはどんな読み方や活動が必要なのかを児童とともに練り上げることで、見通しをもって学習に取り組めるようにした。また、毎時間の振り返りが形式的なものにならないよう、次の時間へのつながりを意識し、どう改善していくかを考える時間を設定した。学習課題を解決する方向性を明確にし、「今日は何をしたらいいのか」を子どもが自ら考えられるようにした。その結果、学習を進める中で、計画を見直して必要な学習を加えたり、変更したりするなど、自分で主体的に学習を調整しようとする姿が見られた。友達の読み方を取りいれている児童も見られた。

一方で、何をするか毎時間決められずにいる児童もいた。困っているときに友達や指導者に相談する習慣が身に付いていないこと、自分が何に困っているのか自覚していないことなどが原因ではないかと考えた。できていないことや難しいと感じていることを否定的に捉えるのではなく、客観的に自分の学習を振り返ることで、次に生かすことできるということを実感できるようにしていきたい。

○考えを広げるための伝え合い、話し合い活動

本学級では、これまでの国語の学習の中で、伝え合いや話し合いの時間を設定したことで、「友達の話を聞いて新しい考え方を得られた。」とする児童の姿が見られた。一方で、特定の友達と交流することが多い児童や、目的も無く何となく友達と学習する児童の姿も見られた。また、友達の意見や考えを聞くだけで終わってしまう児童も多かった。そこで、「何のために友達と交流するのか」を問いかけ、「友達と交流してどうだったか」を振り返るようにした。自分の目的を達成するにはどんな友達と、

どれくらい的人数で交流するのを見直すことで、目的を明確にした交流になるのではないかと考え、実践を行った。共有の目的を意識するようにしたことで、誰と学習するかその都度変えたり、個人での学習と複数人との学習を使い分けたりする姿が見られた。また、共有の仕方を振り返ったことで、反省を次時に生かすことができた児童もいた。

一方で、考えを共有することに消極的な児童もいる。自分の考えをまとめて満足していることや、友達に聞きに行くことが恥ずかしいと感じていること、自分の意見を言うことに自信ないことなどが原因として考えられる。国語だけでなく教育活動全般で、他者と考えを共有することに慣れ親しむことや、自分の考えを言っても大丈夫という安心感のある学級経営をしていく必要があると感じた。